

「主イエスの宣教」

2014年07月12日

マルコによる福音書 1章 35節～39節。「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。シモンとその仲間イエスの後を追いつけると、『みんなが捜しています』と言った。イエスは言われた。『近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。』そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。」

主イエスの神の国の宣教はガリラヤの民衆を惹きつけた。心身に共に激しい飢えと渇きに晒されていた民衆は、主イエスの言葉と業に現された具体的な神の愛を知り、歓喜をもって受け入れた。宣教を開始し、十字架の死を決意してエルサレムに向かうまでの宣教期間を「ガリラヤの春」と言っている。使命をもって宣教に向かう主イエスの周りには、群がる民衆の春の喜びで満ち溢れていた。

多忙な宣教をしていた主イエスは、朝暗いうちに起きて人里離れた所へ行って、一人で祈っておられた。福音書は、主イエスはひとり山に登り祈ったと短い言葉ではあるが、しばしば書いている。主イエスは祈りの人であった。そして、その祈りが激しく厳しい公生涯を支えたのであろう。祈りは心の全てを神に打ち明けることである。打ち明けた心に、神の命と力が注がれる。祈りは静的なことであるが、動的な行動を生み出していく。「コマ」は回さずに芯を地面に突き刺せば、立つ。コマを回すと地面に立つ。両方とも立っているが、エネルギーは全く違う。祈りは、回っているコマのようにエネルギーを神から注入される。倒れないように、しばしば祈り、神の命と力に与り続けていく。主イエスの一人静かな祈りが、神に動かされた宣教を可能にしていた。

主イエスが祈っていると、シモン（ペトロ）たちが来て、民衆はあなたを求めていますと告げる。主イエスは宣教のために遣わされてきたと答え、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。神の愛を共有する「ガリラヤの春」を迎えていた。

主イエスと弟子たちの宣教団はどのような群れであったのだろうか。後に、12弟子たちが選ばれ、宣教団に奉仕する女性たちも加わっている。二十数名の群れであったと想像される。群れは喜びと笑いに満ちていたと思うが、主イエスが「笑った」という記述はない。子ろばに乗ってエルサレムに入城した時、ルカ福音書 19章 41節に「都のために泣いて」、また、ラザロの死を悲しむマルタや村人たちが泣いているのを見て、ヨハネ福音書 11章 35節に「涙を流された」と、泣き、涙したことを記している。しかし「笑い」については全く書いていない。旧約聖書の詩編 2編 4節に「天を王座とする方は笑い」と珍しい表現がある。洗礼者ヨハネは禁欲的で生真面目であったから、周りは緊張感で張りつめていただろう。主イエスは破天荒なラビ（教師）で、日本風言えば「破戒坊主」であった。何処でも、誰とでも食事をし、ぶどう酒を飲む宴席を楽しんでいる。何よりも、長年の病気がいやされ、狂おしい悪霊から解放されたのだから、喜びの笑いが吹きあがっていたに違いない。人は、辛気くさいところは嫌いで、ユーモアと笑いのあるところに集まる。主イエスの宣教団は青空のように明るく、楽しい群れで、その笑いが人々を惹きついていたのではない。「喜びのおとづれ」をいただいた教会は、おおらかなユーモアと笑いを発散したいものだと思う。